

「天井裏」の勝手な願い

オースティン・バルジョナ

村上春樹の短編小説「天井裏」が伝えたいことは、勝手な願いを持つことに気をつけろということだと思う。この短編小説で、主人公の「私」は正月の元旦に、妻に天井裏の中で小人の「なおみちゃん」がいると言われる。なおみちゃんとは、身長十二センチ、顔つきが妻にそっくりだ。それを聞いても、「私」は妻の言うことを信じない。しかし、その後、主人公はなおみちゃんを目にする。小説の終わりに、主人公が天井裏から出てくると、なおみちゃんも家も全て消えている。全てが消えてしまうという結末は、「私」が自分勝手な考え方をしたせいで起きたのだと思う。

短編小説の始まりで、妻は「私」に丁寧語を使わない。しかし、「私」に「小人って、いったいどんな小人なんだ？」と言われた時、丁寧語を使った。さらに、小説の初めに、「私」はテレビを見たり、ビールを飲んだりしている。確かに、せっかくの正月なのだから、休みたい気持ちがあるのだと思う。そのため、妻がなおみちゃんのことを話してきた時、「私」は怒った。「私」は妻と話したくなかったので、不機嫌になった。妻が「私」の不機嫌な気持ちを感じたから、妻の話し方はちょっと冷たくなったと考えることができる。これは妻がだんだん「私」の前から消えるという意味だと思う。

他にも、「私」が天井裏でなおみちゃんを見た時、「私」によると、なおみちゃん目は「小さな氷のかたまりみたいに硬く凍てついていた」とある。そして妻によると、「なおみちゃんはふたりのことならなんだって知っている」。これは妻の冷たい気持ちがなおみちゃんの姿になって現れたという意味だと思う。つまり、なおみちゃんは二人についての全てを知っているということを表している。そのため、なおみちゃんが消えた時、妻も「私」の前から消えてしまったということだろう。

また、短編小説の終わりで、「私」はなおみちゃんに「出ていけ、消えちまえ。馬鹿やろう」と言う。その後、言われたとおりになおみちゃんは消えた。同様に、妻も消えた。しかし、消えたのはなおみちゃんと妻だけではなく、家も全部消えた。これは「私」の願いが勝手すぎたので、家も消えてしまったという意味だと思う。

「私」は妻の話を聞きたくなかったり、なおみちゃんを見たくなかったりしたので、結局は家も全部消えてしまった。この話が伝えたいことは、自分勝手なことを願うと、悪いことが起きるということだ。例えば、お金持ちが自分だけのため金を使ったら、寂しくなる。友達や家族の気持ちを気にしないから、お金持ちの大切な人々が離れていく。確かに、自分中心に

だけ考えれば、自分のほしい物を手に入れることができる。しかし、家族とか、友達とか、他の気持ちを考えなければ、自分だけに悪いことが起こる。